

お大師さまの古い池の、蒼蒼した水の上にも、いつの間にか暖かい春の日ざしがさすやうになりました。櫻が一本、あかるいばつとした色を、まるで花傘のやうにひろけてゐました。

「なにしろかう温かくなると、おれの甲羅も蒸されくるやうだ。甲羅の上でも「春」か踊つてゐるやうで、なんといふいい氣持ちだ。」

年寄つた龜は、かう心でつぶやくと、うとうとと睡りつづけました。この年老ひた龜は殆ど一生涯夢ばかり見つけてゐたやうなもので、それでゐて、れいの不思議な龍宮を會つて見たことがないのでした。龜の仲間のものが、みんなその龍宮の夢を見てゐるにかかはらず、この年寄りの龜だけは何十年生きてゐたかもしれないが、さういふ華やかな夢さへみたことがないのでした。

「おれは龍宮なんてものを見たことがない。いつたい龍宮なんてものが此世にあらう筈がないのだ。嘘だらけだ、その證據には、まだおれは一度も夢にさへ見たことがないからだ。」



年寄り龜は、「さう言ひながら居ると、そばにゐる同じ年寄りの龜も、又た調子を合せるやうに言ひつづけました。

「お前ばかりではない。おれだつて見たことがない。誰か見た仲間がゐるだらうかな。いや、誰も見ないのにちがひない。お前たちどうだい。」

その石垣の上には、すつほん、錢龜、人取龜、藪龜、青龜、小龜平家龜など、ごろごろ日南ほつこをしながらゐるが、この年寄り龜を物憂げに見上げ、そしてだるさうに答へました。

「まだ見たことがありますよ。だが何時かは見られると考へながらゐるのだ。さう考へないと生きてゐる氣がしせんからな。」

若い第一の龜がさういと、第二第三の龜も、又それに調子を合せました。

「おれ等はまだ若いから、どういふ立派な龍宮を見られるかもしれない。きつといいことが道端で待つてゐるだらう。」

年寄り龜は、わらひながら、しかし氣の毒さうに答へました。

「切角、さう考へてゐる方がよい。おれにもお前たちにも、まア、此池が龍宮なんだよ。この池

より外におれたちの龍宮はないんだよ。」

「そんなことがあるものか、櫻は咲くし、暖かくはなるし、甲羅はびんびん張りつめてくるし、龍宮は間近くにあるのだ。おれだけはそれを信じてさへ居ればいいんだ。ぢいさん、そんなことを言はずにお休なさい。」

若い龜はさういふと、をかしさうに笑ひました。

「それならそれを信じてゐるんだな。」

さう年寄り龜はいふと、こつくりこつくり居ねむりをつづけました。

## 二

それから十年も経つたあとに、やはり若い龜は、蒼々とした池水を控えた石の上にしゃがんで、ぢつと空を凝視めながら、ぶつぶつ呟やいてゐました。

「はて、おれはこのごろ少しも龍宮のことを考へなくなつたのは、どうしたことだ。あれほど戀



しがつた龍宮のことが一向、夢にさへ見なくなつたのはをかしい。いつたい、龍宮なんてあらら管がないのだ。おれは生れ落ちるとお大師さまの池にばかり居たのだ。」

若い龜は、いつの間にか甲羅に、水苔が生え、足搔きももの憂く、ほとんど、終日ねむつてかり居たのでした。そして自分の年寄つたことがだんだんに感じられてきました。目がうすく、あまり晴れた日ざしが眩しくならなかつたのです。

「やはり何も無い世界だ龍宮なんてものは、人間どもの考へたことが、お大師さまの考へたことにちがひない、實際はおれだちは夢にさへみたことがないのだからな。」

かれが、さう言つてゐると、がれより最つと若い龜どもは、くすくす笑ひはじめたのです。

「そろそろ、ぢいさんの獨り言がはじまつたよ。いつまで生きてゐる氣なんだか。いいがけんにしてくれないと、やすやす睡てもゐられない。」

年寄り龜は、若い方へ向き、たづねて見ました。

「お前だちは又龍宮のこと考へてゐるのだらう、それならもう止せ、さういふことは若いうちだけの考へだよ、年寄りになると、龍宮なんてことは實に馬鹿々々しいとなんだよ。すると若い龜は、

いつさいに聲をあけて笑ひました。

「お前さんのやうに龍宮もみないで年老つた龜はお氣の毒だ。」

さう言つて對手になりませんでした。

年寄り龜は、それから五年経つと、さきの龜のやうにいつの間にか死んでしまひました。その甲羅はみんな細工物になつてしまひました。

## 三

十年後若い龜は、ふと或は日、れいの年寄の龜のことを考へると、ほんやりした顔をして

「先祖の又先祖から考へた龍宮は、たうとうおれにも見えなかつた。實際は龍宮なんてないものに違ひない。」

さう言つて、そのつぎの時代の、若い龜に却つてわらはれました。

「龍宮は爺さんのうすい目には、見えはしませんよ、おれだちのやうな生き生きした目でなけれ



ば見えないんだ。」

若い龜は、岩の上で、先祖から何百疋乗ったか分らない岩の上で、ゴウ然と、反りかへつて叫んでゐました。

「いまに見てゐろ、あいつも年寄つてしまふから。」

老ひた龜は、悲しさうにさういふと、岩から離れたところに、若いものの邪魔にならないやうに踢んでゐました。

## 四

或る日、二人の少年がそのお大師さまの池にきて、こつんこつんと一顆づつの、ぎんなんの實を老ひた龜の甲羅を目かけ、打ちつづけて居ました。そのたびに、老ひた龜はびつくりして、からだの中へ、手足や首すぢを縮めました。

「この年寄りにいたづらをする人間なんて、しやうがない奴だな。」

さう言つて、じろじろ少年の顔を見上げてゐました。少年は、その年老ひた甲羅を近く寄つて眺めると

「この甲羅に君、龍宮が書いてあるよ、誰がいつたい書いたんだ。旗だの乙姫がるよ。」も一人の少年も近づくと呼ぶやうに言ひました。

「あ、書いてある、これは不思議だ。」

年老つた龜は、びつくりして

「おれの甲羅に龍宮が書いてあるつて子供らが言つてゐるな、さうすると愈々おれも龍宮へきたのだな。」

さう考へると、嬉しくてなりませんでした。春がきて櫻が咲いた門内が美しい繪のやうにみえました。が、その翌日この龜もたうとう、その永い生涯も終つて、しづかに死んでしまひました。



人形師辨吉



物見櫓のうへから、大手先き御門の、片側がお濠の蒼い水を控えた登城道路には、もう朝掃きの程よい打水のしめりが行き互つてゐるのが見える。登城過ぎの時刻のこととて、町人小者が通るばかりである。が、たまに、桃割、高島田、御殿髻などの、結び立ての美しい類の女などが、高々とその艶深い髻を伸してあるいてゐた。

「殿、ご覧せられたか。」  
「うむ。」

物見櫓の上では、火繩を持った加賀百萬石の、御自慢の阿蘭陀渡りの鐵砲は、すぐ、道路の上の結び立ての高島田の匂ふばかりな黒髪の元結の根もとに覗ひがつけられた。

「間近くござります。」

近侍の少年は、すぐ目下に近く歩いてくる女を眺めながら言つた。



殿は、火繩を刎ねた。ぶすつと響いた。道路の白い玉砂のうへには、元結を打たれた高島田が、ばさりと、あでやかに一絲亂れずに打ち落された。娘は、おどろいて、物見櫓の上をながめると、ばたばた馳け出した。櫓の上では大きな笑聲が起つた。

殿は、阿蘭陀渡りの鐵砲の柄がしらに、小柄で、また、鬻落しの數をきざみ込んだ。六人目で六本の刃傷がつけてあつた。

道路では、町人小者が群れて、鬻を氣味悪さうに圍んでるのが見えた。

「結び立ての鬻にかぎる。手應へがあるやうでいい氣持ちや。」

殿は、さういふと、また、諸國お武家泊り宿とかいた町角に、すらりとした、高鬻が一人あらはれたのを眺めた。小女が紫の房のついた狀箱やうなものを持ち、女房らしい黒塗り骨の日傘を指しながら、靜かに町角から大手筋へあるいてきた。下着のあかの蹴出しに、燕藍のうすものを着込んだ下町あたりの、わざとらしい素足を光らせてるのが、殿の、火繩癖を昂奮させた。殿は、渴いた喉もとを一と抉りやるやうな氣で、筒先きを向けた。

「一發で射止める。」

殿は、ぶすつと、日傘の裏から、たまを潜らせた羽搔ひ打ちのつもりだったが、二寸ずれて日傘を射ぬいだ。殿は、その音を苛立つて聞いたが、もう一度、火繩をはねて、小女の、煙草盈髪をぴんと打ちぬいだ。

高鬻は、小坊主になつた小女と、すぐ裏町へ馳け込んだ。――

それゆえ、城下大手先き御門には、いつとなく女の通行を見なくなつたのである。

## 二

城下のお味噌蔵町のうす暗い通りに、人形師辨吉の住居があつた。辨吉は、團扇人形を城へおさめるために、日夜、仕事場にこもつてゐた。

辨吉の室は、竹骨・練土、女の髪や、足型や手型、まだ塗りをしない泥人形などが、ところ狭くならべられてあつて、腰窓から明りのほか、室のなかは、あぶらと土の臭ひで一杯だつた。

ふしぎなことは、辨吉のうしろに、三尺くらゐの、臘のやうな白い皮膚をした人形が、しづかに



辨吉の腰のあたりを、小さい團扇であほいでゐた。それが窓外の萩叢の障子際れがするほか、何一の物音のないあたりに、きみわるく動いてゐた、袖口から食み出した生白い手が機械的に右と左とにくの字なりに動くと、團扇からすこしつつの風がはらんでゐた。

辨吉は、顔塗りをすました人形に、黒い瞳の上の、ほそい睫毛を描きながら、織い小間書筆を唇のさきで嘗めながら居た。

そこへ客があつて、夏祭までに人形の注文があつたが、辨吉は、多忙と、加ふるに仕事がよく種だつたので、即座に断はつた。

「親方などは、ちよいとの暇で大した儲があるんだから。」

さういふ客は、日焼けのした、大道藝人の輩だつた。わけても、金唐草の煙草入れを、これ見よがしに弄くつてゐるのも小癩な氣がした。

「まさか辨吉が轆轤首と一緒に、見世物人形は作れますまいさ。」

客は、ふしぎさうに、團扇人形の、團扇を動かしてゐるのを眺めながら、間もなく去つた。

「お伊木や。」

十六になる娘は、通してならぬ客を通したので、氣をそこねたかと、父の室へはいつて行つた。

「茶を一杯。」

さういふと、また、仕事にかかりはじめた、この間から、お茶汲み人形の拵へに、お伊木はしばしば、父の繪型に茶をもつて室へ這入らなければならなかつた。頑固で、しんねりと黙りこくつた父親の性分を受けついで、お伊木は、いつも陰氣にくすんだ書物まで選ぶやうになつてゐた。

お伊木は、何時のやうに、茶をささけて、仕ごと場へ這入つて行つた。静かな繪型の時間をそらさないやうに、足のはこびもおろそがにできなかつた。同じ團扇人形のやうなバネ仕掛けで、襖から這り出るやうな作りで、これも城内からの納品の吩咐になつてゐたのである。

辨吉は、自分も出来あがりだが、陰氣になつたこと、うすぐらい陰影と、病んだやうな物懶さをもつてゐることを、人形をみるたびさう感じた。

「お伊木、もつと明るい顔になつてくれ。どうもお前は沈んでゐていかん。お前がしづんゐると人形まで沈んでしまつてこまるんだ。」

辨吉は、母によく似た娘の、極端な細づくりな顔が、あまり細すぎてゐると、たへず物を考へ



込んでゐるやうな、年頃の娘にもない憂鬱な目つきを覗きこんだ。

「だつてお父さん、しづんでゐるのであつたの性なんでございますもの。」

お伊木は、にこりともしないで、愁はしげな眉根をそらせた。辨吉は、その眉表情に母親思ひ出した。

「芝居へでも出かけたらどうだい。一日、龜ばかり弄くつてゐるでもあるまい。」

「お芝居はきらひでございます。」

お伊木は、庭の泉水で、どこから捕まへてきたのか、一疋の龜を二三年前から手飼ひにしてゐたいつの間にか、なついた龜は、うすら日を甲羅に干しながら、首すぢを半分ばかり出し裏くぐりからしてくるお伊木の足音を倫みぎきしてゐた。辨吉が出ると、首はそのまゝ、甲羅にかくれて凝乎とみじろぎもしなかつた。お伊木の、そつと、忍びあるきして近寄るときなど、龜は、その尖端鋭い六角首を擡げて、お伊木の手ざわりの柔らかさを夢見るやうな目付をしてゐた。

「お前は變な女さ。まるでお母さんそつくりだ。」

辨吉は、さういふと又仕事にかかりはじめた。お伊木は、黙つて仕事場へ出ると、庭へ出た。

むら躑躅のかげの、ひたひたした木かげに、龜は、ほんやり浮いてゐた。が、お伊木の足音をきくと、その長い山葵のやうなごりごりした首をもちあげて、お伊木の方をながめた。濃い一點の橋のやうな眼が、寂然と、ひ弱いお伊木の白顔に投げられた。

お伊木は、しやがむと、龜の甲羅をしんなりと撫でた。龜は首を出したり縮めたりしながら硬い背骨を廣げるやうにした。

「ずるぶん重くなつた——。」

お伊木は、獨り言をいつて、龜をそつと抱きあげた。そして又水のなかへ入れた。水は重い音を立てて、波紋をゑがいた。

泉水から一間ほど右寄りに、腐れた井戸があつて、粗竹の覆ひかしてあつた。深かつかが、底の方へ碁石ほどの白さで、空が覗き込んで、まはり一杯の蔭ふかい齒朶や虎杖などが繁り込んでゐた、お伊木は、ある日、この井戸べりで龜をつかまへたのである。

お伊木は、竹の覆ひをとると、底水を覗き込んで。

「ああい。おい。」



と呼んでみて、その、こだまが、内部からしてくるのを子供のときから楽しんでゐた。このごろになつては、ただ、覗き込むだけの、深さと暗みと、ひやりとした冷たさをかんじるだけで、べつに聲を立てて、訝をたのしむこととてなかつた。お伊木は、いつもするやうに覗きこんでは、内部から立ちのぼるやうな或る冷氣と、それにつながる不思議な映像をゑがいたりしてゐた。

「お伊木、また始めたね。」

いつの間にか辯吉がうしろに立つて、お伊木の肩に手ををいた。

「さういふ腐れ井戸などを覗くものぢやない。だから陰気になるのだ。」

お伊木は、井戸を離れた。辨吉の顔色がわるくなつてゐた。遠い處で、くされた夜中の寢静まつたときにした。重い、地面のなかからしてくるやうな音だつた。辨吉は、ふしぎに、この井戸のそばへくる毎に、ずつと前のその氣憶をあたらしくした。蒼白いかれの妻が引き上げられて、滴打つてそれが井戸水にひびいて厭な音を立てた。

辨吉は、惻然として、泉水のそばにゐる娘をかへり見た。うしろに暗い枇杷の繁りがあり、お伊木の白地の浴衣姿が、彫つたやうに明るくみえた。それゆゑ、なほ、辨吉は、その姿を寂しく見つ

めた。

「お伊木、釘と金槌とを持つてきておくれ。竹覆ひを打ちつけるから。」

お伊木は、黙つて、その吩咐通りのものを搬んだ。

「お前があまり覗くし危ないから打ちつけて仕舞う。」

辨吉は、娘のかほを愉み見た。お伊木は、さうなさいましたと言つたきり、べつに止めもしなかつた。辨吉は、そのときのお伊木の足もとに、ちぢんで睡つてゐる龜を目にいった。氣のせいだか龜の方でも、うすら目で、辯吉の方をちうと、かけの舌のやうな光で盗み見た。

「その龜を井戸へ入れてしまはぬか。井戸は深くていい。」

お伊木は、顔色を変えて、すぐ龜の甲羅を抱えた。

「いいえ、これを井戸に入れたらすぐ死んで了ひますよ。これはなりません。」

辨吉は。さういふお伊木が懸命になつてゐる口振りを目にいれると、もう云ふまいと考へた、



「それなら其處に放しとけ。併し井戸へ入れても死ぬことはないよ。」

「いえ、死にます。あそこは水がくされて居りますから——。」

辨吉は、それには答へないで、すぐ井戸枠く竹覆ひを打ちつけた。かあかんかんといふ蔭氣なひびきが、井戸底からもんどり打つて、生きもののやうに戻つてきた。それが頭にひびいて痛かつた曲つたなりの釘が一本、枠外へ尖り出して、それを直さうとした。が、氣もち通りに曲らないで、頑固に尖り出して一度に苛々しかつた。

龜は、首なしの、石ころのやうになつて居た。音がひびいたのか、お伊木も、蟬谷のあたりが菲のやうに青くなつてゐて、それを細い指さきで、きりきり揉んでゐた。

「あゝ草臥れた、音がかんかんひびいて辛いことぢや。」

辨吉は、額の汗を拭きながら、かたはらの葉石の上に腰をおろした。年のせい、息切れが静かなあたりの空氣にひびいて、苦しうにお伊木のところまできこえた。

お伊木も、ほんやり立つてゐた。辨吉も、つかれて、一ところの青い葉ツ葉を見つめてゐたのである。が、そのとき、重い濁りをおびた水音がどんよりと井戸底から、かなり遠くなつてきこえ

た。

「やあ。」

辨吉の、その聲は、お伊木の心臓をぐざと抉り抜いたので、びつくりした、辨吉自身も思ひかけない自分の聲音におどろいた位だつた。

「お伊木。聞いたか。」

お伊木は、立つたまゝ震えて、眞蒼な顔をこちらに向けてゐた。

「ええ。」

と答えて、低いこゑで、あたりを忍ぶやうに

「あれは何んでせう。」

「あれか、あれは鼠でも落つこちたのだ。よく井戸にゐるものだから。」

辨吉は、さう答へると、お伊木の顔を見ぬやうにして、暗いしげみに目を放つた。そこにもほんやり影のやうな人物をうつすりと目に迫られた。



お茶式人形は、殿の、お居間に侍づいたが、よく茶を疊にこぼした。ちよこちよこ歩きするバネ仕掛けだったので、動きの粗いときには、よく不調法をした。

殿は、さういふとき苛々して、どこか陰気な人形を睨んだ。が、人形の方では、やはり茶を零した。

「無禮者。」

しまひには、つい佩刀に手がかけられると、ばさりと人形の首を刎ねた。土の切れ味の悪さと無気味さは、首なしのまゝ、やはり、殿の方へバネ仕掛けであるき出した。

殿は、それを肩先きからも斬り葉て、足蹶にした、さういふときでも、れいの、團扇人形だけは落着いて、ふはりふはりと心憎いまので澄し返つて、金桶模様の眩しい彩光を翻してゐた。殿はいらいらして、それを凝乎と眺めてゐたが、むら氣立つて、睨んでゐた。

近侍の小姓坊主、奥詰二疊控えの人々も、つい呼吸を嚙んで、このごろ變になつた殿を恐る恐る

眺めてゐた。

「止まれい。」

かれは、さう人形に對つて叫んだが、人形は、そ知らぬ振りで、やはり頑固に團扇を動かしてゐた。同じ動かない表情の、目と鼻とは、苛立つた殿を小聰しけに見詰めるだけで。莫迦にされたやうな氣がして、殿は、近侍を見廻すと、聲音を張りあげた。

「誰か、止させい。」

が、突然で、誰も立たなかつた。浮腰の、もちもちと恐怖に脅やかされた人々は、さうなればなるほど猛り立つ殿を、仕方なく見詰めるだけだつた。どういふときでも一嵐がくるとその過ぎるまでは、呆然と眺めてゐるより仕方がなかつたのである。

「聞えぬか。」

殿は、ふたたびさう叫んで、振り向いたかと思ふと、團扇人形の、美しい首級はころりと疊の上に轉がつた、轉がつ奴が三廻りほどすると、停つて、その動きのない表情がじつと殿の方へ向けられた近侍は、すぐ人形の死體を受取かたづけた。殿は、ただ、むやみに猛り立つて、その死體



を辨吉方へ取らすやうに言つたのである。

## 四

人形師辨吉の宅では、同じ時刻に、お伊木が寂しさうに庭口に立つてゐた。が、ふしぎなことに、井戸の方へ歩いたときに、何にも變つたことがなかつたのに、向脛をスツと一寸ばかり斬られた。氣がついたときには、遣つた手の平にべとりと血がにじみついた。自分の血を始めて眺めたお伊木は、一體、何のためにこんな傷がつか分らなかつた。と、山蔭の茂つた暗みある方から、きき……と鎌いたちが錐のやうな啼音を立てた。ぞつとするほど鋭い浮齒になるやうな聲音だつた。

辨吉も、すぐ出てきたが、傷處を一見すると

「鎌舂だ。あいつは姿を見せないで傷をつけることがあるんだ。」

お伊木は、その鎌舂なるものを知らなかつた。父親も、やはり梢なぞにも居ることがあるといふだけで、たしかに見たことすらなかつた。

「やはり舂の一種だらう。家へ這入るといい、危ない。」

辨吉はさういふと、お伊木を庭口から、家の方へいれた。お伊木は、ふりかへつて、恐さうに落の茂りと、腐れ井戸の上にかぶさつた茶萐の樹に、たははに垂れさがつた赤い、寧ろ、毒々しい實の色をながめた。

「お父さま、茶萐が赤うなりました。あんなに——」

すこしも氣がつかない間に、お伊木は、赤みで染つたやうな樹をながめた。日のあつた梢は、かつと冴え返つて赤かつた。

「うむ。茶萐がかい。」

父親のさういふ聲の下から、山蔭の蔭では、ききき……い、——と、鎌舂め、酢のやうな聲を立てた。

「いやな舂だこと。」

お伊木は、その聲のするたびに、傷どころがきりきり痛むやうな氣がした。

辨吉は、そこにあつた石を拾ふと、蔭傘の累なりあつた茂み目がけて投げつけた。ばさりと破れ



た音がした。緑ほい水氣ぐんだ音だった。

「あいつは額だつて斬りつけるんだから。」

辨吉は、獨り言をいつて、家のなかへ這入つた。お伊木もつづいて、やや暗みをかんじる室の中に、やりかけの縫物仕ごとをはじめた。が、氣がふさいで、傷どころが痛んでならなかつた。

「お伊木。」

「ええ。」

「痛むのかい。」

仕ごと場から、やはり仕事を任はずしてゐるらしい父親の聲がした。きつと、ほんやりしてゐるだらうと……。

「ええ、すこし痛みますの。」

お伊木は、ぞくぞくする傷どころにそつと、手をやると、熱氣があつて、ほてつて、指さきがあつた。何氣なく、踏んだ飛石つたひの石莖のかけだつたか、それとも厠裏の葉蘭の黒ずんだところからか、ふいに、すつと冷たいものが觸れたかと思ふた瞬間だつた。ペとりと赤いものがなが

れたそれを思ひだすと寒かつた。それとも井戸底からだつたかも知れなかつた。

「お伊木。」

「ええ。」

父親は、いつになくお伊木の名を呼んだが、別に用事がありさうにもなかつた。ときどきさういふことはあるが、けふは、ことにそれが烈しかつた。

「何かご用でございますか。」

間を置いて父親のねむいやうな聲がした。

「いや、何でもない。」

お伊木は、針の手をやすめ、ほんやりと何氣なく障子を見つめた。いつものことで、れいのお茶式人形のかげが、ほんほりのやうに影うすく映つてみえた。自分を寫して作られただけ、どうも氣になつて、影のやうに目にうつつてきて仕方がなかつた。

「いやな人形さん。」

お伊木は、目を手で拂ふやうにした。そこには、うつすりとした日ざしが、すこし濁つた水のなか



をさし覗くやうに、ところどころ斑紋になつてうつつてゐた、なんだか、いやな氣がして、鎌鼬のことも妙に煙つたものをからだへ噴き込まれたやうで、鬱いでしかたがなかつた。

「お伊木や。」

また父親の聲がした、氣になつて、そのあとからも、又、呼びはしないだらうかと、びくびくした。

「何んでございますの。」

「いや、べつに何んでもないんだが……」

かういううちに、日の濁つた陰影は、だんだん稀薄になり、障子のそらをつたつて行つた。

## 五

日暮れになつて、城内から車が、とどいた。辨吉は、箱のまゝでおさめた人形が、店の間に撥ばたれたのを見ると、脇の下は冷汗の流れる思ひがした。たゞ、さういふことをするのが判らなかつた

が、疝癥の強い、下々の心としない殿を、かれは、じりじり燃えるやうな不愉快さで考へた。

「辨吉、氣の毒ぢや、が、おさめて呉れい。」

調度役人に多い老年者は、かういふと、受書捺印を求めた。

「お伊木や、印形をな。」

辨吉は、あらたまつて、手をついたまゝ、眉間をびりつとさせて訊ねた。

「人形に無調法でもございましたか。それとも他に何か御氣嫌外れのわけでもございましたか。」

役人は、じみな小豆絞りの袴の埃を拂ふと、眉をしがめた。

「いや、人形には傷なしぢや。安心した方がいい。唯、引つづいての御氣嫌外れの次第での。」

辨吉は、もう尋ねるまでもなかつた。

「分りましたでございます。お役目、おそれ入りました。」

役人が去ると、辨吉は、白桐作りの箱を眺めてゐるが、すぐ開ける氣がしなかつた。お伊木は、ただ、白木の箱を見るだけでも、なにか不吉な豫感におそはれ、ぶるぶる、獨りでに震えた。

辨吉は、お伊木に奥の間へゆくやうに指圖をした。お伊木は、ふしぎさうにそれを聞いた。



「あとで分ることだから——氣にかけない方がいいよ。」  
「え。」

お伊木が出て行つてから、辨吉は、桐箱の蓋を開けてみると、すぐ、顔いろを變え、首を打ち落されたのと、肩さを遣られたのと、疑ひもない刀のきれ味だった。こころもち蒼ざめたやうな顔いろは、形をとつたお伊木そっくりな顔つきだった。辨吉は、それを熟視してゐるうち、長い間、仕つづけた爲事の氣の張り工合、苦心なぞ目にうかべた。

「何といういたづらだ。」

辨吉の、恚りは小鬢を逆立てた。かれは、立ちあがると、箱とも庭へかつぎ出した。そこにあつた蹴をとると井戸の釘づけにした竹覆ひをめくつた。さうするうち、頭は益々混亂し、惡熱をさへかんじた。

かれは、人形を引き出すと、井戸底めがけて、みな投げ込んだ。厭な腐れた水の音が力ない弱い咳のやうに、底からしてきた。最後に、その首まで投げ入れた。どんよりと曇つた暗い音がした。

「あ、いやな音だ。」

辨吉は、さういふと、うすぐらい井戸底を覗き込んだ。空明りをはらんで、ほんのりと生白い、さまざまな崩れた。肢體が浮きあがつてゐたそれがやゝ形體が小さくなつて見えるだけ、なほ、氣味わるく目にうつつた。

お伊木がほんやり庭口に立つて、父親のすることを眺めてゐたが、妙にがちがらが震えてゐる辨吉は、お伊木まで心をつかつてゐるやうで、泣きたいやうな氣がしてならなかつた。

で、お伊木は、石づたひに、井戸の方へちかづいた。

「どうして其麼ことをなさるんでございますの。」

辨吉は、さういふお伊木の顔も、へんに泪ぐんでゐるのを、沁み入るやうに眺めた。

「あとあとに氣が残らないために壊してしまつたんだ。」

お伊木も、井戸枠に手をついて、底の方をながめた。人形の肢體がばらばらに崩されて、浮き沈みしながらゐた。

「殿様はどうしてお斬りになつたのでございませう。」

辨吉は、それには答へないで黙つてゐたが、ふと、思ひ出したやうに、



「どうしてだか。」

半分は冷笑ひながら言つた。午後さがりにお伊木が鎌鼬にやられたことを、思ひあてた。

「お前が鼬にやられたときに人形も斬られたのだ。」

始めて氣がついて、お伊木は、さういふ父親の言葉をびつくりして聞いた。氣のせいか傷どころが、きりきり整されるやうで、疼んで仕方がなかつた。それに、きふに、からだへ尖つたものが刺されてゐるやうな氣もした。

「痛むか。」

「ええ。」

人形の斬られた時刻と同じだつたのも、不思議だつた。お伊木は、肩さきばかりへ手をやつてはなでさすつてゐた。滅入り込みやすいお伊木は、それきり晩方まで、一言もいはなかつた。夏になると來てすだく縞薄のかけで、するちよが、もう素早く、うつりやすい氣候のさきかけを涼風のひまにすだいてゐた。

「そのお伊木人形といふのも、ほら肩先きに傷がついてゐるだらう。が、あとからつけたのかも知れない。」

古い城下町に木彫家を父にもつた里見は、かういふと、肩に傷のある人形を見せてくれた。古びを帯びた蠟のやうな肌と、白い顔とを私は先刻からの挿話に加へて、おもしろく感じた。「實際、鎌鼬と人形の斬られた時間とが同じだつたさうだよ。大した人形作りではなかつたんだらうが……。」里見は、かう附け加へて、古い人形を疊の上に投げ出した。陰氣な動かない瞳にはくらしい貝のやうな光をひそませながら、じつと、仰向けに天井をながめてゐた。どこか落着きと氣味わるさをもつた人形を、私は、こんどは手にとつて眺めたのである。——(終)



大正十三年三月二十日印刷  
大正十三年三月廿五日發行



(定價金壹圓九拾錢)

著者 室生

東京市京橋區本材木町三丁目二十番地  
服部 眞之助



出版者 服部 眞之助

東京市神田區東紺屋町四十七番地

印刷所 文化社印刷部

東京市京橋區本材木町三丁目二十番地

出版元 文化社

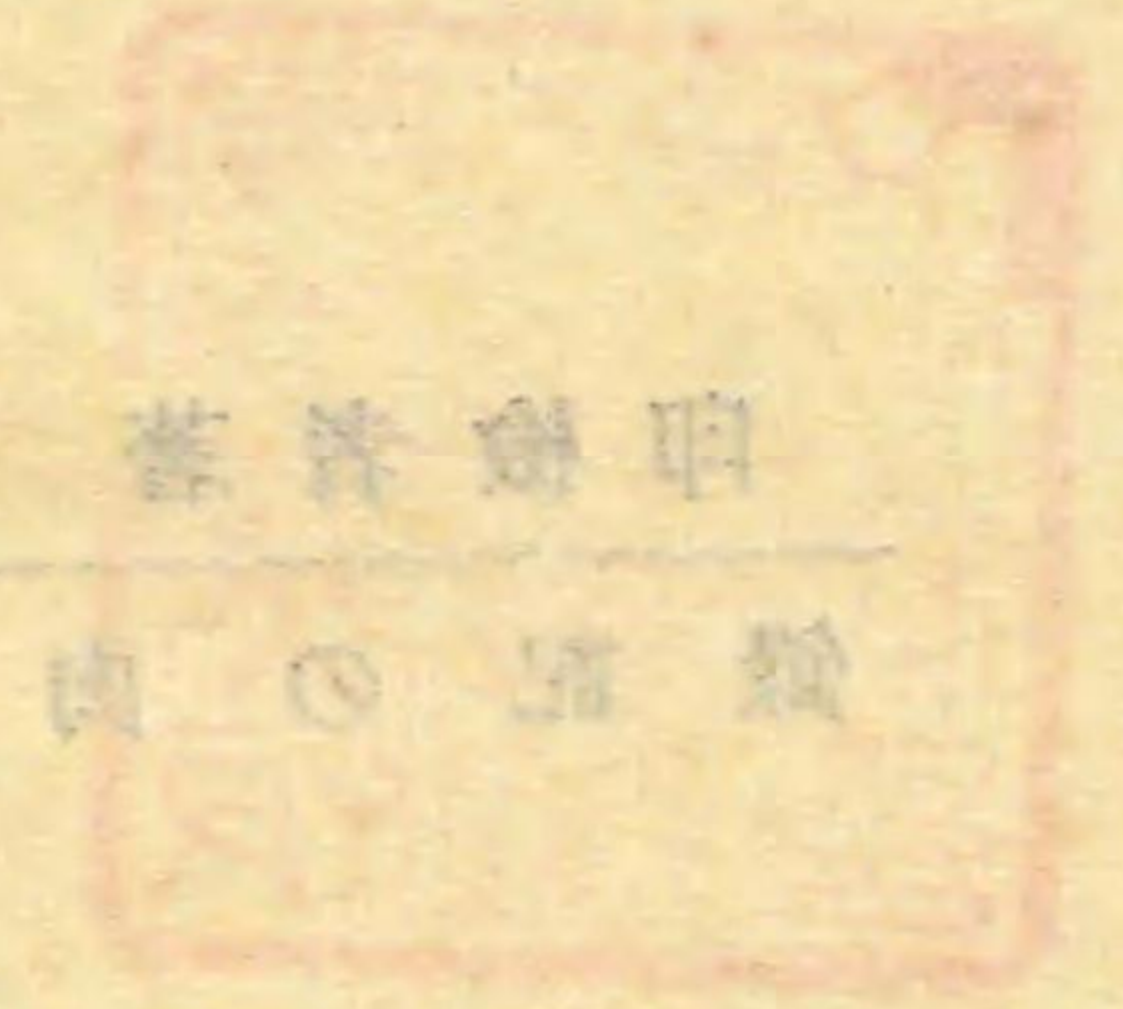
電話京橋二二二九番

大阪市北區玉川町四丁目七十二番地

發賣所 文化社大阪支店

電話土佐堀一四二五番  
電話土佐堀七二六番





明謝濟  
國印

大正十三年三月廿五日發行  
大正十三年三月二十日印刷

發行所

文升社 大野文也

印刷所

文升社

編輯者

文升社

出版者

文升社

發行者

文升社



(文升社發行所)







